

靴の歴史散歩 ⑧⑧

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

『起業秀才 明治百商傳』の巻頭凡例に「諸氏ノ傳ハ聴キ得ルニ随ヒ記載セシモノニシテ ソノ貧富聲名ニ因テ順序ヲ立テシニ非レハ 覽者コレヲ咎ムル勿フ○可ナリ」とあり、西村勝三の伝記は、33頁から43頁まで、11頁にわたって書かれている。

「君ハ下総佐倉ノ人堀田侯ノ臣ナリ 兄ヲ西村鼎ト呼ブ今ノ茂樹氏則チ是ナリ 博學ヲ以テ世ニ著ル 當時兄氏藩主ノ命ニ因テ支族佐野藩主^{カシヒト}ヘ貸人タリ 君天保年間ヲ以テ生ル 天性英邁大志アリ此時ニ方リ尚部屋住^{ヘヤスミ}ニシテ官守ナシ 乃チ兄氏ニ從テ佐野ニ至ル……後略」。明治初期の刊行本なので、ちょっと読みにくいですが、以上伝記冒頭の書き出しである。

封建時代は、長男が家督を継ぎ、あとの次三男は部屋住みの身で、無位無祿というのが普通であった。したがって、長男以外の者は他家に養子に入るかして、世に出る道を探るしかなかったのである。

勝三の三は三男の三である。弟の綾部平輔は幼名を平四郎といい、末弟の勝郎は幼名を平五郎といったというから、名前の付け方が分かりやすい。

『西村勝三翁傳』は、事業の顕彰を主眼に書かれているが、この「西村勝三君傳」は、直接本人から取材したものを元に書かれているから、人間勝三が浮き彫りされていて、まことに興味深く読める。

士農工商の身分差別があった時代に、自から武士を捨てた勝

三の脱藩は、長兄茂樹が藩の重役だっただけに、互いに辛い決断があったものと思われる。しかし事あるごとに家長である茂樹は、豪放で愛すべき弟勝三の身を案じ、人生の岐路には必ず手を差し伸べ、支え合う兄弟愛があったという。

『明治百商傳』発行の明治13年（1880年）といえ、前年、盟友渋沢榮一らの尽力で、会社の負債15万円を整理し、また東京府会議員にも当選したりして、やっと好調の波に乗った時期でもあった。

今回の参考写真は、西村勝三が功成り名遂げて得た4,000坪（約13,200平米）の邸宅である。

『西村勝三翁傳』（大正10年 西村翁傳記編纂会）に「日清戦後に至り翁の経営せる各種の事業概ね成功の域に達するや、地を品川御殿山に相し、宏壯の邸宅を築きて此所に住す。即ち終焉の地なり。」とある。



品川御殿山邸